

「若手研究者支援 1 次募集」海外調査	
(タイトル) 中国語を母語とする日本語学習者の視点表現「てくる」の習得－母語の役割に着目して－	
氏名 管 晶 (GUAN JING)	所属 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻
渡航期間 (実際の出発日～ 帰国日)	2026 年 8 月 28 日 ～ 2026 年 9 月 22 日
活動期間 (学会開催期間、 または実質的な現 地調査の期間)	2026 年 8 月 31 日 ～ 2026 年 9 月 18 日
場所	吉林省 (中国)、天津 (中国)
施設	大学の教室

内容報告

1. 調査目的

本調査の目的は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、CJL）の視点表現「てくる」の習得における母語の役割を明らかにすることである。今回はその課題解明のための予備調査である。視点表現は、話し手が事態に対する立場や態度を示す重要な手段の一つであるが、これまでその習得の困難さは指摘されてきた。しかし、「てくる」に関する習得研究は少なく、とりわけ CJL を対象とした研究の多くはコーパス分析によるもので、要因の統制が困難である。母語の影響についてはまだ明らかな証拠が得られていないと言える。母語による影響は海外の日本語学習者において顕著であると指摘されているため、本研究は中国在住の CJL を調査対象者とする。

2. 調査方法

本調査は大学で日本語を専攻している N2 合格者を対象に、①対象者のプロフィール（年齢、日本語学習歴、日本語能力試験の取得点数など）に関する質問紙調査、②日本語レベルを測るテスト、③「てくる」の習得における母語の役割を調査するための容認性判断テスト、④「てくる」の意味用法に関する認識を把握するためのインタビュー調査を実施する。そのうち、日本語テストはオンラインで受験できる筑波大学日本語・日本事情遠隔教育拠点の TTBJ（筑波日本語テスト集）の SPOT90 を使用する。

3. 調査結果

中国語には「てくる」に対応する形式の“V 来”が存在する。日中対照研究では、「V てくる」と“V 来”は、「空間移動用法」において形式上対訳できる場合が多いが、意味機能に相違が存在するため、対訳できない場合も存在すると指摘されている（管,2025）。本研究は、この対照研究の知見に基づき、以下の予測を立てた。つまり、言語間の微妙な違いを反映している「V てくる」の「空間移動用法」の習得において、CJL は母語の影響を受け、「V てくる」の正用文と誤用文を区別できず、いずれの場合も自然と判断する。初期分析を行ったところ、結果は上記の予測をほぼ支持しており、CJL は「V てくる」の使用が不自然となる文でも、自然と判断する傾向が見られた。

参考文献

管晶 (2025) 「移動方向動詞が前接する「V てくる」と“V 来”の対照研究」『日中言語対照研究論集』27, 17-31.

かん しょう／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

L1 Chinese Learners' Acquisition of the Japanese Viewpoint Expression *-te kuru*: A Focus on the Role of the Native Language
GUAN JING